

的外

みのる法律事務所便り
第333号
平成30年1月



みのる法律事務所
弁護士 千田 實
〒021-0853
岩手県一関市字相去57番地5
TEL : 0191-23-8960
FAX : 0191-23-8950

みのる法律事務所 <http://www.minoru-law.com/> / ✉ minoru@minoru-law.com



いなべん だべんく
田舎弁護士の駄弁句 ⑭

よろく
余禄だよ
夢は大きく
大胆に



平成30年1月5日

今日から仕事始めですが、後期高齢者も2年目に入ります。親父の年を超え、3年目になります。さすがに、「もう年齢か」と落ち込みました。

自宅を出て、隣の事務所まで数十歩歩いているうちに、気持ちが180度変わりました。「この先は、余禄だ。何をやっても失敗などない」と思えてきました。

予定したこと、期待されたこと、全て超えました。こんなに長く生きるつもりはありませんでした。これからやることは全て、予定した収入以外に得る金品のようなものです。余禄です。

そう考えると、どんなことも恐れずに進めそうです。これまで考えてもいないような破天荒な夢を持つことにします。今年の年頭に大風呂敷を広げ前向きに進みます。

田舎弁護士の駄弁句 ⑮

とし とし
年齢は年齢

おこな

行いは小さく

ていねい

丁寧に



平成 30 年 1 月 5 日

夢は大胆でいいのですが、年齢は年齢です。無理は禁物です。大きく行うことできません。小さく小さくしかできなくなりました。

どんなに大きな夢でも、小さなことの積み重ねがなければ達成できません。小さな積み重ねこそ、大きな夢を実現させる唯一の途なのです。

細かいところまで注意をいきとどかせて、小さなことをやり続けることこそ、大きな夢を叶えてくれるのです。病人や高齢者は無理ができません。それがよいのです。行いを小さく丁寧にやるのには、病人や老人の方が向いています。なんだかやれそうな気がしてきました。

前句とこの句は一对として詠みました。

『癌体験記』の紹介

一諦めてはならないことを急いで知らせたいのです

平成 29 年後半に、この事務所便りで何回かに分けて、癌に関することを書きました。1 冊の本にまとめようとやってきましたが、なんとか平成 29 年中に脱稿できました。割と長文となってしまいました。出版までもう少し時間がかかると思います。その間にも癌宣告を受け、殊にも癌の進行が進み、末期癌などと言われた方の気持ちを思うと 1 日も早くこの本は読んでほしいのです。

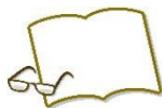
そこで、この本の結論部分をこの『的外』で紹介することになります。この部分だけをお読み戴くだけで、心が上向きになると確信しています。身の周囲に、癌で苦しんでおられる方がおりましたら、ここの部分だけでも読ませてやってください。

癌治療の専門医は、「国民の半数が癌になり 3 分の 1 が癌で死亡する時代です」と語っています。私の身の周囲の人にも癌で苦しんでいる人が大勢います。癌に対する不安で落ち込んでいる患者とその家族がいます。ですが、癌の実体を知らないために必要以上に癌に対する恐怖心に苛まれて^{さいな}いる方が少なくないのです。

この本で、癌の正体を明らかにし、「幽霊の正体見たり枯尾花」ということに気付いてほしいのです。その上で、その正体に対し怯むことなく、立ち向かってほしいのです。諦めないであらゆる手段を用いて癌を治してほしいのです。それを実践し、奇跡的効果を出している人が現にいるのです。急いで、そのことを知らせたいのです。

あとがき

一癌について書いてみて



人生には、生まれた瞬間から残された時間しかないのです。その残された時間はいくらあるのかは誰にも分かりません。癌宣告を受けようと受けまいと、それは同じなのです。

そう考えれば癌を特別に意識することは不要です。癌宣告、特にステージの進んだ癌宣告を受けますと、余命つまり残りの命を強く意識しますが、残りの命を意識するのは、癌患者だけではなく、誰だって同じ筈なのです。

癌患者に限らず、人間は誰でも、残された人生という時間を極限られた範囲の極一部の人たちと、その一瞬一瞬を楽しみ合えばそれでよいのです。どう考えても、それしかできないのです。

この本を書いてみて、改めてそう思いました。この本を書いてみて、改めて人生はどう生きたらよいか、という問題を考えました。そしてやはり「人生は^{まわり}周囲の人といっしょに楽しみ合うのみ」という『いなべんフィロソフィー』に帰着しました。

身の周囲には、癌と闘っている人が大勢います。ですが、癌と闘っている人だけが、残された時間を気にすべき立場で

はないのです。残された時間を気にしなければならないのは、健常者だって同じなのです。

その意味では、癌患者に対し、特別に意識するところはありません。むしろ、癌宣告を受け、残る時間を意識するようになったら、それは生き方を考える上で大きな進歩です。

癌宣告がなければ、残された時間という意識がなく、いつまでも生きていられるような錯覚に陥ったまま、ズルズルとした生活をしかねないのです。

癌宣告を受け、殊にも癌のステージが進んでいることを知り、残された時間が気になり、残された時間を有意義に生きたいという意識が強くなることは、素晴らしいことだと思います。まさに「苦難福門」となるのです。



いま、この本を書き終えて申し上げたいことは、「癌患者の皆様もそうでない皆様も、残された人生の一瞬一瞬をいっしょに楽しみ合いましょう」ということです。

人生をいっしょに楽しむコツのひとつとして、癌患者の皆様は、いっしょに癌を知る勉強をし、いっしょに癌を乗り越える方法を見付けだし、いっしょに癌患者であることを楽しみ合いましょう。残された人生を楽しみ合いましょう。

年を取ったり、癌宣告を受けたら、「病を楽しむ」という

心の持ち方こそ、残された時間を楽しむコツなのです。

年を取ったり、癌宣告を受けた者でなければ分からない人生の楽しみ方もあるのです。そのような人達が、いっしょに残された時間を楽しむためには、どうしたらよいか、いっしょにそれを見つけ出し、いっしょに実行してみたいと考えるようになりました。

残された時間が少なくなったと考えている皆様は、「残された人生は、一瞬一瞬を楽しむだけ」ということに気がきます。癌宣告を受けるまでは、そのことに気付かなかったのに、それを気付かせてくれた癌に感謝しましょう。

その恩返しのつもりで、癌を楽しみ、残された人生を楽しむために、やれることはとことんやりましょう。人事を尽くして参りましょう。「やるだけやったら肩叩き合い」と参りましょう。癌について書いてみて、極当たり前のことに改めて気がきました。「残された人生を、楽しみ合いましょう」

平成 29 年 12 月 10 日



あとがきのあとがき

—あきらめなければならない



あきらめてはならない



昨日、あとがきを書いた直後の今日、R子さんの最新のCT検査結果報告書が出ました。グッドタイミングです。間に合いました。

その報告書には、「局所再発は認めません。腹水は消失しています。PC結節は認めません。腫大リンパ節や胸水は認めません。肝転移も認めません。」と印字されていました。最後に手書きで、「癌は見えなくなった」と書かれていました。

ちなみに、腹水とは^{ふくくう}腹腔内に液体の溜まる病症（広辞苑）であり、胸水とは^{きょうまくくう}胸膜腔内に溜まる液（前同）であり、PC結節とは腹膜に出るできものようです。腫大リンパ節とはリンパにできるできもの、つまり癌ではないかと思えます。

これらのいずれも認めませんということは、癌に伴う症状は見られなくなっている、ということだと思えます。そのため、^{わざわざ}態々手書きで「癌は見えなくなった」と書いてくれたものだと思います。

平成 29 (2017) 年 12 月 4 日に抗癌剤治療をしている病

院で行われたCT検査の結果では、R子さんの癌は見えなくなりました。昨日、その結果が分かったのです。

癌マーカーは、それより前から正常値となっていました。R子さんのQOLは、既に癌発症前の状態に戻っています。家事をはじめとする日常生活には、何らの支障もなく、グラウンドゴルフさえできています。それを裏付ける検査結果が出たのです。

この検査結果とQOLによりますと、R子さんの癌はほぼ治っているとと言っても過言ではありません。免疫細胞療法を行っている病院でも、平成29年11月29日の診療治療の際、「**模範的、理想的患者**」と言われていたそうです。

ここまでくれば、R子さんの状態は素人目には、「**完治した**」と言っても過言ではないような気がします。完治とは言えないとしても、一般通常人レベルに戻ったと言えそうです。一般通常人だって、癌細胞は持っているのですから、「癌と、なんのかわりもない」などとは言えず、R子さんのいまの状態と変わらないのです。つまり、R子さんは、もう一般通常人レベルに戻ったのです。

R子さんも家族の皆様も、「これは奇跡だ」と喜んでいきます。娘さんも、「これは先生御夫妻のお陰です」と涙を流してくれました。



私達夫婦は、ただ、「なんとか助けられないか」との一心で、R子さんに合う治療方法はないかと情報を集め、抗癌剤治療と、免疫細胞治療の併用を勧めただけです。



エビデンス（治療効果の科学的証明）については私には全く分かりませんが、結果として、その療法がR子さんの場合、うまく合ったということだと思います。

一時は、余計なお節介を焼いたという思いもありましたが、このような結果が出て、私たち夫婦も幸せをもらいました。年末になって「いい一年になった」と語り合っています。

R子さんの腹膜播種、ステージ4の宣告を聞いたのは、平成29（2017）年5月16日でした。あの時は、「年内、命は持たせようか」という思いがしました。今日12月11日ですから、あれから7ヶ月弱の今日、「癌は見られなくなった」という診断を受けたのです。「普通では考えられないような、不思議な素晴らしい出来事」です。「奇跡」と言ってもおかしくはありません。

奇跡とも思えることが、現実にかかることがあるのです。R子さんのケースはステージ4の癌宣告を受けた患者の皆さんにとっては、「希望の星」です。

このタイミングで、R子さんのこの検査結果を報告できる

幸運に、奇跡とも思える、ありがたい縁を感じています。

「ありがたや あゝありがたや ありがたや 巡り合えた いい時いい人」といういなべんの駄弁句そのものの心境です。

この本では、諦念観^{ていねんかん}を持ち出し、「あきらめなければならぬ」と述べました。「癌宣告を受けたら、じたばたしないで、あきらめ、その事実を受け容れなければならない」と述べました。そういう意味では、あきら（明）めなければならないのです。

ですが、「癌を治すということ、残された人生を楽しみ尽くすということについては、あきら（諦）めてはならない」のです。

試行錯誤、つまり色々やってみて、自分に合う治療方法と残された人生を楽しみ尽くす生き方を見付けなければならないのです。そういう意味では、あきら（諦）めてはならないのです。



次から次へと身近な人の癌宣告の情報が入ってきます。この方々を励ましてあげたいという一心で、この本を書きましたが、R子さんの検査結果の報告は、その目的を果たすには最も効果的な材料です。

あとがきを書いた翌日に、R子さんの最新情報が届きまし

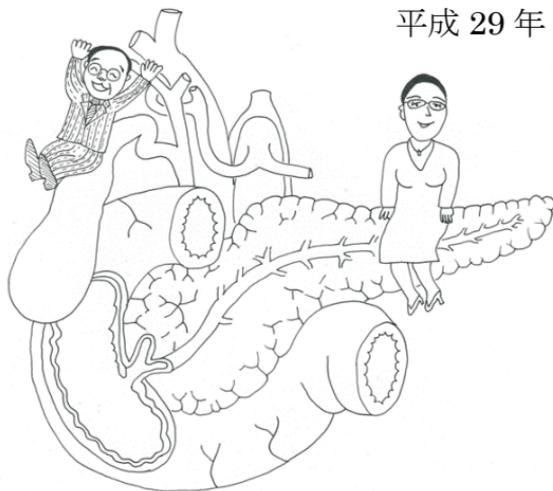
た。「あとがきのあとがき」という格好で、R子さんの検査結果を報告できることの幸運に、ただただ感謝あるのみです。

癌患者は、「あきら（明）めなければならないのですが、あきら（諦）めてはならない」のです。

この言葉を、この本のメインタイトルとすることとしました。癌の宣告を受けたら、その事実を受け容れ、癌の治療方法と、楽しく生きる方法をあきら（諦）めることなく探求しましょう。「人事を尽くして天命を待つ」だけです。

いなべんのモットー（人生の指針）は、「粘り強く 負けても頑張れ 最後まで」です。いなべんのフィロソフィー（哲学）は、「人生は楽しみ合うのみ」です。生かされている間、粘り強く人生を楽しみ合いましょう。

平成 29 年 12 月 11 日



新刊紹介と謹呈の御案内

『長生きを楽しむコツ 第14巻

—いっしょにやることを楽しむ その2』



『長生きを楽しむコツ』シリーズ（桜色の本シリーズ）は、第13巻を平成29年4月7日に発刊して以来、しばらくの間発刊していませんでした。やっと、平成30年1月20日に第14巻が発刊されました。イの一番にこの事務所便りをお読み戴いている皆様にお読み戴きたく紹介させて戴きます。

この14巻は、『いっしょにやることを楽しむ その2』というタイトルが示すように、誰かと何かをいっしょにやることを楽しむことが人生を楽しむ、長生きを楽しむコツであることを述べたものです。誰かと何かをいっしょにやることを楽しむ具体的な方法は、無限にあると思います。この本では、私が誰かといっしょにやって楽しかったことを、一例として挙げています。これは、極狭い私の経験にすぎませんが、その具体的方法は人の数の数倍はある筈ですから、まさに無限にある筈です。他人に知らせなければならぬものではありませんが、情報交換できたらそれだけでいっしょにやることを楽しむことになりそうです。

昨年は、駄弁本100冊の発刊ができ、記念講演会をさせて戴きました。これは ^{ひとえ}偏に、この事務所便りをお読み下さっている皆様のお陰です。感謝の心を込めて、この本を皆様に謹呈させて戴きます。

もし、お読み戴いた上で、身の周囲の人にも読ませたいというお気持ち湧きましたら、購買申込書を同封しますので、宜敷くお取り計らい下さいますようお願い申し上げます。これまで発刊した1巻から14巻までの全てについて御案内申し上げます。

